



Title	『遼史』中の音写漢字に反映された契丹語の音声と音韻
Author(s)	武内, 康則
Citation	内陸アジア言語の研究. 2015, 30, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『遼史』中の音写漢字に反映された 契丹語の音声と音韻

武内 康則

1. はじめに

契丹語は 10 世紀に中国東北部に契丹国（遼）を建てた「契丹」と呼ばれた民族が使用していた言語である。契丹語はすでに死語となっており、文献資料によってその研究が進められている。契丹語の系統については、近年では Janhunen [2003] の述べるように、鮮卑が使用していた言語と同じ系統であり、モンゴル諸語と関係があるとされる。しかし、現在一般的に知られるモンゴル諸語の直接の祖先とは言えず、それらとは大きく異なった特徴を持つ言語であったと考えられている。

契丹語の言語資料には契丹文字⁽¹⁾によって記録されたものと漢字によって記録されたものの 2 種が存在する。近年陸統と契丹文字資料が発見され、契丹文字の解読研究は大きく進んだ⁽²⁾。そして、文献に記された内容が徐々に解読されていくと同時に、契丹語の言語特徴も次第に明らかになってきた。その一方で、漢字によって残された契丹語の資料を用いて契丹語の言語特徴を明ら

(1) 契丹大字と契丹小字の 2 種の文字体系からなる。出土資料の多くは墓誌などの石刻資料であり 10-12 世紀に作成されたものが確認されている。

(2) Wu & Janhunen [2010: 47-48] によると、契丹大字と比べ研究が進んでいる契丹小字に関しては約 70% の構成要素について発音や意味など何らかの手がかりが得られている。

にしようとする試みはこれまで十分に行われてきたとは言えない。その理由は、記録された語彙が少なく深く研究することが困難であるためである。しかし、これら漢字資料は当時の契丹語の音声の記録として、契丹語の音声・音韻の解明のために欠かせないものである。本稿では、漢字資料に記録された契丹語を組織的に収集し、それらに反映された契丹語の音韻・音声の特徴について考察を加える。

2. 先行研究

契丹語の音韻に関しては研究者によって大きく認識が異なっている。契丹語の音韻に関する研究として、愛新覺羅 [2004], Shen [2007], Shimunek [2007], 孫・聶 [2008] などがあるが、資料の扱い方や研究方法に関しても大きな相違があり、これらの先行研究の結論は一致しておらず、更なる研究が必要である。

契丹語の音声に関する特徴に関しては、漢字資料の分析が有効と考えられる。漢字により音写された契丹語（以下、漢字音写語と呼ぶ）は、契丹語の音声が当時の中国語の使用者にはどのように認識されたかを反映しており、これらを精査することによって契丹語の音声の特徴をある程度知ることができるからである。これらの漢字音写語については、数多くの先行研究がある⁽³⁾。しかし、それらのほとんどは契丹語の言語特徴を明らかにすることを目的としたものではなく、個々の語彙に考察を加えることを目的としたものである。本稿の目的と同様に、契丹語の音韻・音声の分析のために漢字音写語を用いているものとしては聶 [1988] がある。聶 [1988] は、漢字音写に用いられる漢字の分析から契丹語の音韻・音声の重要な特徴を指摘している。しかし、組織的な方法で分析がなされているとはいいがたく、近年の契丹語研究の成果を考慮し再検討する必要がある。

⁽³⁾ 漢字音写語を扱った主な研究としては白鳥[1910-1913], 長田[1951], Franke[1969], 于 [1998], Shimunek [2007], 孫・聶 [2008] などがある。

3. 研究方法

3.1. データ

劉[2004]によると、宋代の目録学の著作中には契丹語と中国語の対訳語彙集であったと考えられる『辨鳩録』・『夷語録』・『北慮方言』などの書物の記録が残されていると言う。しかしこれらはすべて散逸し伝わっていない。現在利用することができる漢字音写語は、主に遼の正史である『遼史』⁽⁴⁾や北宋の資料である『契丹國志』⁽⁵⁾などの歴史書に断片的に記録されたものに限られる。特に『遼史』卷百十六「国語解」には、『遼史』中に見られる語彙についての注釈が残されており、その一部は契丹語の語彙に言及したものである。例えば、「国語解」には「捏褐耐 犬首也」⁽⁶⁾との記述がみられるが、ここでは契丹語で「犬首」を意味する語の発音を、「捏褐耐」(近世音⁽⁷⁾ nie xo nai)と漢字による音写によって示している。また、「国語解」で扱われている語以外にも『遼史』中にみられる固有名詞や称号などの一部も契丹語を音写したものとみなすことができる。中国側の記録である『契丹國志』にも『遼史』と同様に契丹語の音写が断片的に伝わっており、余靖や刁約による契丹語を用いた詩の記録も見られる。

本稿ではより正確な分析のため、音写のなされた年代を限定し、また用いられた音写システムの一貫性にも配慮するために、『遼史』中に見られる漢字音写語のみを用いた。データは于[1998: 259-359]によって収集された漢字音写語を基礎とした⁽⁸⁾。于[1998]は、『魏書』や『元史』など『遼史』以外の文献資料に見られる漢字音写語も収集しているが、それらは『遼史』中に見られる漢字音写語と同時期に音写されたとは考えられないので、データと

(4) 元・脱脱等奉勅撰。元・順帝の至正3年(1343)3月に、遼・金・宋の三史の纂修が命ぜられ至正4年(1344)4月に完成したとされる。

(5) 宋・葉隆礼撰。著者は、淳祐7年(1247)の進士である。

(6) 『遼史』中華書局評点本, p.1543.

(7) 近世音の音価は楊[1981]に基づく。

(8) 于[1998]は、契丹語の人名の収集は行っていない。本研究においても人名はデータとして利用していない。

して利用しなかった。さらに、『遼史』に含まれる漢字音写語であっても、遼朝建国以前の部族名・可汗名など音写のなされた時期が不明瞭なものや、音写された年代が異なると考えられるものは排除した。具体例を示すと、『遼史』には「契丹」と音写される民族名が出現するが、これは遼代や『遼史』の編纂時期に成された音写とは考えられず『魏書』など他の文献に見られる音写をそのまま踏襲したものとするべきである。したがって、『遼史』にみられる音写がそれ以前に作成された文献にも同時にみられる場合、『遼史』に見られる音写はその文献の音写を踏襲したものとしデータから除外した。

また、『遼史』中の漢字音写語には、複数の語から成ると考えられるものも含まれている。たとえば、「聞撒」と呼ばれた地方機構の名称として「達鄰頻你」や「打里頻你」など「頻你」という要素を共有する漢字音写語が『遼史』中に出現する。これらの漢字音写語が共有する「頻你」は1つの独立した語であり、これらの漢字音写語は複数の語から構成されている可能性も否定できない。さらに、「袍達夫人厥只」・「老昆令公果直」・「僧隱令公果直」など、中国語を含む複数の語から形成されていると考えられる音写もみられる。このような漢字音写語に関しては、語境界の分析が恣意的になるのを避けるため、敢えて語の分割を行わず原資料通りの表記を用いた。それらの語境界などについて配慮せねばならない場合には、本文および注釈で適宜言及することにした。

3.2. 音写に用いられた中国語の音韻

漢字音写語を用いて研究を進めるためには、はじめに音写に用いられた中国語の発音を推定する必要がある。馮 [1987] によると、元・脱脱による『遼史』の編集の際には、遼・耶律儼によってまとめられた『皇朝実録』、金・陳大任による『遼史』、宋・葉隆礼による『契丹國志』などが利用されていると言う。したがって、音写もそれらの資料が作成された年代になされたと考えるのが合理的ではある。しかしその一方で、Shimunek [2007: 22-24] は、『遼史』中の漢字音写語のうち少なくとも一部は『遼史』の編纂時に改めて音写されたものである可能性を指摘している。筆者の調査に

においてもそのように考えるのが妥当な例を見ることができた。中国語の音韻史では中古音の疑母*ŋ-は、近世音ではそのほとんどがゼロ声母へと変化する。遼・金代に作成された契丹文字資料には中国語を契丹文字で表記したものを見出すことができるが、それらにおいては疑母*ŋ-は例外なく ŋ を表示する文字によって表記されていることから、疑母*ŋ-のゼロ声母への変化は契丹文字資料が作成された年代よりも後であると考えられる⁽⁹⁾。しかし、契丹小字資料では𐰽𐰺*o'oi と表記される部族名は、遼代に作成された漢文墓誌では「烏煨」（中古音⁽¹⁰⁾ ʔo ʔuɐi, 近世音 u ui）と音写される一方、『遼史』では「烏隗」（中古音 ʔo ŋuɐi, 近世音 u ui）と表記され、音写に疑母*ŋ-を持つ「隗」が用いられている〔蓋 2007: 183-188〕。これらが同一語の音写であるからには、『遼史』の音写がなされた段階では疑母 ŋ- がすでにゼロ声母へと変化していた可能性を考えねばならない。また、契丹小字で𐰽𐰺*ism と表記される人名が『遼史』では「宜新」（中古音 ŋjě siɛn, 近世音 i siɛn）などと音写されているのも同様の例といえるであろう。したがって、Shimunek [2007] の指摘するように『遼史』に見られる漢字音写は遼代になされたものだけではなく元代のものも含まれていると考えるのが妥当である⁽¹¹⁾。したがって、音写に用いられた中国語としては、切韻系韻書が反映する中古音の末期および『中原音韻』（1324 年）が反映する近世音を参考にせねばならない。

(9) 契丹文字によって表記された中国語が契丹文字資料の作成以前に契丹語に定着した「字音」であった可能性についても考慮せねばならないが、契丹小字による中国語音の表記においては吉池 [2003, 2004a & b] や傳 [2013] の指摘するように、後期の資料になるほど中国語音を表記するための専用の文字が作成されるなど、より忠実に中国語を表記しようとする傾向がみられる。この点から考えて、契丹小字資料中にみられる中国語音はすでに定着した「字音」であったと考えることはできず、当時の使用されていた中国語の発音を音写したものであると考えるべきである。

(10) 中古音の音価は平山 [1967] に基づく。

(11) ちなみに、『遼史』とほぼ同時期に編纂された『金史』中の女真語の漢字音写語においても、音写に用いられている疑母*ŋ-がすでにゼロ声母へと変化していたことを示唆する例が見られる〔孫 2004: 93-95〕。

本稿では、一般的な北方漢語の発展を想定して音写に用いられた中国語を推定する。中古音から近世音への発展で声母に関しては、軽唇音化 (p- p^h- b- > f-, m- > v-)、全濁声母 (b- d- g- ㄉ- ㄌ- ㄓ- ㄔ- ㄗ- ㄘ- ㄙ- ㄙ-) の無声化、舌上音 (k- t^h- ㄑ- ㄒ-) の正歯音 (tʂ- tʂ^h- ㄗ- ㄘ- ㄙ- tɕ- tɕ^h- ㄗ- ㄘ-) への合流、さらに多くの疑母 (ㄎ-) 字は多くの場合ゼロ声母に合流した。その結果、中古音の末期から近世音では (1) のような声母の体系を持つようになる [楊 1981; 寧 1985]。

(1)

p	p ^h	t	t ^h			k	k ^h
		ts	ts ^h	tʃ	tʃ ^h		
f		v	s	ʃ		x	
				ʒ			
m		n				ŋ	
		l					

当時の中国語の音節構造は、(C)(V)V(V,C)/T である。筆者の想定する契丹語の音節構造は(C)V(V)(C)(C)である。音写の際には漢字音の音節初頭子音によって契丹語の音節初頭子音を表すことはある程度可能であったと考えられる。また、近世音では音節末尾の子音は、m, n, ŋ だけであるので、音節末子音によって契丹語の音節末子音のすべてを表すことは不可能であったと考えられる。契丹語の音節末子音を音写する際には、おそらく単子音の表記のために一つの漢字を使用するなどの方法も用いられたであろう。

4. 分析

本節では、契丹語の音写に用いられる漢字を声母の調音点や漢字音写語における出現位置に従って整理し、その漢字の分布から契丹語の音韻・音声について考察を加える。本稿では、漢字音写語のデータを基礎として主に契丹語の子音の音声・音韻的特徴について扱うが、契丹語の音韻体系の全体について考察を加えるものではない。したがって、漢字音写語から分析のための十分なデータを得ることができない契丹語の母音体系や一部の子音については扱わない。

なお、複数の発音を持つ漢字については最も一般的と考えられる発音を採用し、発音が不明な漢字についてはデータから除外した。

次節より、調音点ごとに契丹語の音声・音韻について分析する。

4.1. 唇音

はじめに、漢字音写語に用いられる唇音声母を持つ漢字について、声母の種類と漢字音写語中での出現位置（語頭・語中）によって分類した漢字の分布を〔表1〕に示す。〔表1〕では、はじめに声母の種類によって分け、表の第2枠では使用されている漢字とその使用回数⁽¹²⁾、第3枠にその声母を持つ漢字の使用総数を示している。なお、漢字の現れる位置を「語頭」と「語中」の2つに分けて示しているが、ここでは「語頭」は漢字音写語の1文字目に使用される漢字、「語中」は2文字目以降に使用される漢字をそれぞれ指す。

(12) たとえば、〔表1〕の声母p-の行の第2枠に「伯1」などの記述が見られるが、これは収集した漢字音写語のうち、「伯」という漢字が語頭に1箇所用いられていたことを示している。

(表 1)

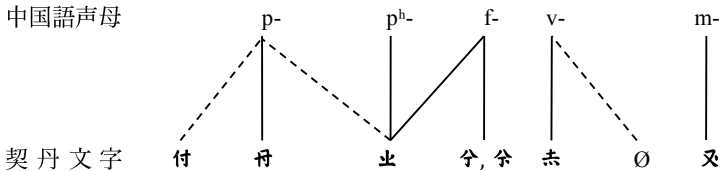
声母	用いられている漢字	総数
p-	【語頭】(幫*p-) ⁽¹³⁾ 伯 1, 百 1, 遍 1, (竝*b-) 勃 1, 別 1	5
	【語中】(幫*p-) 卑 2, 本 9, 保 1, 把 1, 必 1, 畢 3, 不 16, 撥 1, 柏 1, (竝*b-) 部 1, 僕 1, 勃 1	38
p ^h -	【語頭】(滂*p ^h -) 滂 1, 滄 1, 𪛗 1, (竝*b-) 皮 1, 蒲 2, 頻 1, 袍 1, 婆 1,	9
	【語中】(滂*p ^h -) 滂 1, (竝*b-) 排 1, 頻 5	7
f-	【語頭】 なし	0
	【語中】 (非*f-) 夫 1	1
v-	【語頭】 なし	0
	【語中】 なし	0
m-	【語頭】(明*m-) 彌 1, 梅 1, 蠻 2, 麻 1, 謀 2, 慢 1, 緬 1, 麼 1, 麼 1, 馬 1, 母 1, 抹 4, 蔑 2, 滅 2, 莫 1	22
	【語中】(明*m-) 迷 2, 梅 1, 門 1, 麻 2, 滿 1, 勉 1, 免 1, 馬 7, 母 5, 木 1, 沒 1, 抹 1, 末 2, 蔑 1, 滅 1, 麼 1	29

聶 [1988] は漢字音写語には非母 (*p- > *f-), 敷母 (*p^h- > *f-), 奉母 (*b- > *f-) の漢字は用いられないので, 契丹語には f はないと言う。筆者の調査においても, 聶 [1988] の指摘するように漢字の分布には大きな偏りを見る

⁽¹³⁾ 参考のため, 中古音での所属声母およびその推定音を示した。

ことができた。すなわち、声母 p-や p^h-を持つ漢字は音写の際に多く使用されるが、声母 f-や v-を持つ漢字は基本的に使用されない⁽¹⁴⁾。これは、漢字音写を行った人物にとって、契丹語には中国語の p-や p^h-の範疇として認識される音は存在したが、f-や v-と認識されるような音がなかったことを示唆している。契丹文字資料から得られるデータもこの結果と矛盾しない。契丹小字資料には当時の中国語を契丹文字によって表記したものを見出すことができる。それらの表記における中国語の声母と契丹文字との対応の概略は〔図1〕のように図示することができる。

(図1)



〔図1〕では、実線と破線によって、中国語の声母がどの文字によって表記されているかを示している。たとえば、声母 p-と契丹文字 𐰢・付・𐰣が接続されているが、このことは声母 p-の表記に、𐰢・付・𐰣の文字が用いられることを意味している。破線によって示されている 𐰣および 付は、数が少なく例外的な対応であることを示している。〔図1〕より、多くの場合、声母 p-は契丹小字では 𐰢によって表記されるが、声母 p^h-および f-は 𐰣・𐰤・𐰥によって表記されていることがわかる。したがって、契丹文字では、中国語の声母 p-は、p^h-および f-とは区別して表記されているが、声母 p^h-と f-は区別されて表記されておらず、契丹語においてはこれらの中国語の声母は弁別的ではなかったことがわかる。〔表1〕のデータとあわせて考えるならば、契丹語に

⁽¹⁴⁾ 例外として声母が f-である「夫」があるが、この漢字は「袍達夫人厥只」という音写語で用いられている。この音写は複数の語から構成され、「夫人」の部分は中国語であると考えるべきであろう。

は中国語の f に相当する音がなかったため、音声的に近い声母 p^h と区別することができず、同じ契丹文字によってその声母を表記したと考えるのが合理的である。

声母 v は、𐰚 によって表記される。𐰚 は契丹語の固有語の表記には用いられない。〔表 1〕のデータは契丹語には中国語の v に相当する音がなかったことを示しているの、𐰚 は中国語音の表記専用の文字であったと考えてよいだろう。中国語の声母 v はのちに影母や喻母と合流しゼロ声母となるが、影母や喻母など他の声母の表記において𐰚 が用いられることはない。〔表 1〕や〔図 1〕は当時の中国語にはゼロ声母とは独立した声母としての v が存在していたことを示している。

漢字音写語において声母 m の漢字は多く使用されている。契丹小字では中国語の声母 m は、ほぼ規則的に 𐰚 で記される。𐰚 が他の声母の表記に用いられることはないことも、契丹語に中国語の m に相当する音が独立して存在していたことを裏付けている。

ここで、〔表 1〕のそれぞれの子音の出現位置に注目したい。語中においては声母 p^h を持つ漢字は 7 回使用されているのに対して、声母 p を持つ漢字は 38 回使用されており、分布に大きな差が見られる。さらに、語中で使用される声母 p^h をもつ漢字として「頻」が 5 例見られるが、それらは「達鄰頻你」・「打里頻你」・「合不頻尼」・「合不直迷里幾頻你」・「聶里頻你」など、いずれも「聞撒」と呼ばれる地方機構の名称として使用されている。これらはいずれも「頻你」（あるいは「頻尼」）を共有している。したがって、「頻你」（あるいは「頻尼」）は一つの独立した語であり、これらの漢字音写語は 2 つ以上の語から構成されていると解釈することができ、「頻」は語頭で使用される漢字とみなしてよい。結果として、中国語話者にとっては契丹語の語彙においては、語中では声母 p^h の範疇と認識される音が出現することはまれであり、声母 p と知覚されるものが多かったことになる。語頭・語中におけるこれらの漢字の分布は契丹語の音素配列を反映している可能性もあり興味深い。

4.2. 歯茎音

はじめに、漢字音写語に用いられる歯茎音声母（閉鎖音）を持つ漢字について、声母の種類と漢字音写語中での出現位置（語頭・語中）によって分類した漢字の分布を〔表2〕に示す。

〔表2〕

声母	用いられている漢字	総数
t-	【語頭】(端*t-) 打 1, 得 2, (定*d-) 膺 1, 獨 1, 達 4, 奪 4, 迭 7, 敵 2, 迪 1, 特 5, 牒 4	32
	【語中】(端*t-) 都 2, 敦 2, 墩 2, 登 2, 底 3, 抵 1, 典 1, 朵 3, 等 1, 斗 2, 點 1, 篤 6, 的 3, 得 11, 德 1, 答 1, (定*d-) 獨 1, 達 3, 奪 1, 迭 2, 特 7, 突 2	58
t ^h -	【語頭】(透*t ^h -) 拖 1, 吐 2, 土 2, 腆 1, 禿 1, 撻 3, 鐵 2, 托 1, 臑 1, 忒 1, 塔 1, 塌 1, 帖 1, 鬪 1, (定*d-) 圖 2, 題 1, 唐 1, 潭 3, 陶 1	27
	【語中】(透*t ^h -) 太 1, 土 1, 鐵 1, 忒 3, 撻 1	7

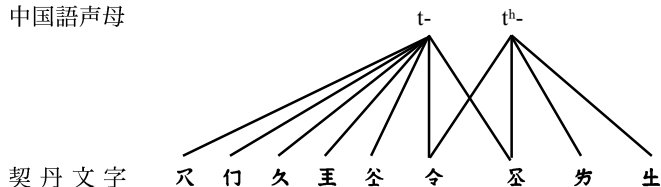
声母 t- と t^h- のどちらの漢字も多く用いられる。契丹語には少なくとも音声的には声母 t- と t^h- に対応する音があったことを示している。さらに、唇音の場合と同様に語中においては声母 t^h- を持つ漢字が、声母 t- を持つ漢字と比べ、使用されることが少ないことがわかる。語中で声母 t^h- を持つ漢字が使用されている例としては、「牒耳葛太保果直」・「査刺土鄰」・「潭馬忒」・「合四卑臘因鐵里卑稍只」などがある。「牒耳葛太保果直」中に見られる「太保」は中国語と見なすべきであろうし、これらとは独立して「土鄰」・「潭馬」・「鐵里」などの漢字音写語が記録されていることから、これらは複数の語から構成され

ておりこれらの音写に見られる声母 t - を持つ漢字も、語頭の表記に用いられたものであると解釈してよい。したがって、唇音の場合と同様に歯茎音においても語中での有気音声母を持つ漢字の使用は極めて限られていると言える。

次に、契丹小字資料における中国語音の表記に注目して見ると、契丹小字で表記された中国語音においては〔図2〕のように声母と契丹文字との対応の概略を図示することができる。

〔図2〕

中国語声母



声母 t - と $tʰ$ - の表記に用いられる文字が、 t - と $tʰ$ - 以外の声母の表記に使われる例はない。しかし、**𐰼** および **𐰽** は、 t - と $tʰ$ - のいずれの表記にも用いられている。その一方で、**𐰼** と **𐰽** 以外の文字は声母 t - あるいは $tʰ$ - のどちらか一方の表記にのみ用いられている。また、**𐰾** <du>⁽¹⁵⁾ 「都」(近世音 tu), **𐰿** <tu> 「徒」(近世音 tʰu) の例のように声母だけが異なるミニマルペアとも言うべき例も確認することができる。中国語の声母 p - と $pʰ$ - の対立は弁別的であり、唇音には2種の閉鎖音を持つことを考えると、音韻目録の対称性を考慮しても歯茎音の閉鎖音も2種存在したと考えるべきであろう。

(15) < >によって契丹文字の推定音価を表す。本稿では、契丹語に存在した2種の阻害音は有声音／無声音の「声」の対立によるものと仮定する。

次に摩擦音・破擦音について検討する。漢字音写語に用いられる歯茎音声母（摩擦音・破擦音）を持つ漢字について、声母の種類と漢字音写語中での出現位置（語頭・語中）によって分類した音写に用いられる漢字の分布を（表3）に示す。

（表3）

声母	用いられている漢字	総数
s-	【語頭】(心*s-) 厮 3, 思 1, 須 1, 辛 2, 僧 1, 賽 1, 算 1, 速 4, 撒 7, 息 1, (邪*z-) 詳 1	23
	【語中】(心*s-) 斯 5, 厮 4, 思 2, 新 1, 辛 2, 莎 1, 僧 3, 四 2, 髓 1, 速 4, 撒 4, 薛 1, (邪*z-) 習 1	31
ts-	【語頭】(從*dz-) 集 1	1
	【語中】なし	0
ts ^h -	【語頭】なし	0
	【語中】なし	0

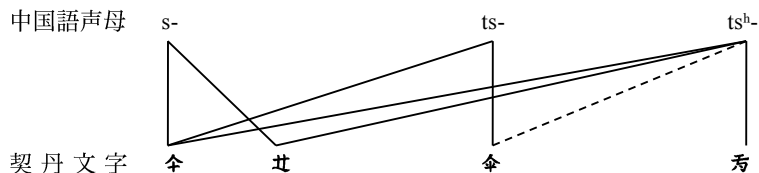
聶 [1988] は、漢字音写語に心母 (*s-) の漢字は使われるが、精母 (*ts-), 清母 (*ts^h-), 從母 (*dz-) の漢字は1つも使われないので、契丹語にはもともと ts- と ts^h- がなく、s- だけが存在したとする。聶 [1988] の指摘する通り、(表3) からは、歯茎音の摩擦音および歯擦音の声母を持つ漢字の分布に大きな偏りが見られることが分かる。すなわち、声母 s- を持つ漢字は音写の際に多く使用されるが、声母 ts- および ts^h- を持つ漢字はほとんど使用されない⁽¹⁶⁾。これは、

(16) 例外として、「集會塢」(地名)の「集」の1例があるが、これは中国語を表記したものと考えるべきかもしれない。

漢字音写を行った人物にとって、契丹語には声母 *s-* の範疇として認識される音は多くあったが、声母 *ts-* や *tsʰ-* と認識されるような音がなかったことを示唆している。

契丹文字資料のデータもこの漢字の分布と矛盾しない。契丹小字で表記された中国語音においては〔図3〕のように声母と契丹文字との対応の概略を図示することができる。

〔図3〕



契丹小字による中国語音の表記では、齒茎音声母の摩擦音と破擦音は、十分に書き分けられていないことが分かる。**𐰆**は声母 *s-*、*ts-*、*tsʰ-* いずれの表記にも用いられ、**𐰇**は声母 *s-* と *tsʰ-* のどちらの表記にも用いられる。この事実、契丹語では中国語の声母 *s-*、*ts-*、*tsʰ-* は本来非弁別的であったことを示している。

その一方で、**𐰆**は主に声母 *ts-*、**𐰉**は声母 *tsʰ-* の表記に用いられ他の声母の表記には基本的に用いられていない。これらの文字に関して吉池〔2003〕・傅〔2013〕は、契丹文字の初期の資料では声母 *s-*、*ts-*、*tsʰ-* は混同されるが、後期の資料では新たに *ts-* を表記するための **𐰆** や *tsʰ-* を表記するための **𐰉** が導入され、これらの声母の表記が精緻になる傾向が見られることを指摘している。したがって、*ts-*、*tsʰ-* の表記に用いられる **𐰆**・**𐰉** は、中国語音の表記のために作られた文字と考えるべきであろう。

以上より、契丹語には本来、中国語の ts-, tsʰ-に相当する音がなく s-に相当する音だけが存在していたと考えるのが妥当である。契丹小字による漢字音の表記で s-, ts-, tsʰ-が区別されないのは、声母 ts-や声母 tsʰ-を持つ中国語音を表記する際には、契丹語には本来それらに相当する音がなかったために音声的に近い別の音素を表示する文字を用いて表記したためであろう。

次に鼻音・流音について検討する。漢字音写語に用いられる齒茎音声母(鼻音・流音)を持つ漢字について、声母の種類と漢字音写語中での出現位置(語頭・語中)によって分類した音写に用いられる漢字の分布を〔表4〕に示す。また、声母 ʒ-を持つ漢字も契丹語の流音の表記に用いられた可能性があるためここに分布を示す。

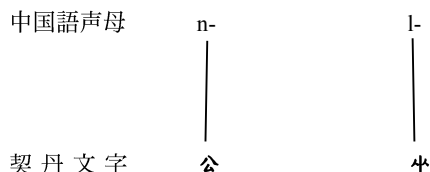
(表4)

声母	用いられている漢字	総数
n-	【語頭】(泥*n-) 孛 2, 耐 1, 𡗗 5, 迺 1, 捏 2, 涅 2, (娘*n _ɾ -) 尼 1, 粘 1, 賃 1, 女 5, 聶 1	22
	【語中】(泥*n-) 奴 1, 孛 1, 乃 2, 納 4, (娘*n _ɾ -) 尼 1, 你 6, 女 3	18
l-	【語頭】(來*l-) 勞 1, 林 1, 令 1, 老 1, 柳 2, 落 1 【語中】(來*l-) 廬 1, 盧 2, 鄰 10, 羅 1, 林 2, 離 4, 瀨 1, 令 2, 壘 3, 李 1, 理 1, 里 72, 俚 1, 呂 1, 魯 20, 懶 3, 輦 3, 刺 16, 列 1, 烈 11, 勒 1, 臘 4	7 161
ʒ-	【語頭】なし	0
	【語中】(日*ʒ-) 爾 1, 耳 1, 兒 1, 呪 2, 倆 1, 而 1, 人 1	8

漢字音写語には声母 *n-*, *l-*を持つ漢字がいずれも使用されており、契丹語のこれらに相当する音が存在していたことがわかる。

契丹文字資料のデータもこの漢字の分布と矛盾しない。契丹小字で表記された中国語音においては〔図4〕のように声母と契丹文字との対応の概略を图示することができる。

〔図4〕



声母 *n-*は主に𐰽によって表記される。𐰽が他の声母の表記に用いられることはない。声母 *l-*は𐰺で表記される。𐰺が他の声母の表記に用いられることはない。したがって、声母 *n-*と *l-*は契丹語において弁別的であり、契丹語にこれらに相当する音素が存在していたといえる。

契丹語の音写に用いられる漢字のうち、声母が *ʒ-*のものには非常に興味深い特徴を見ることができる。音写に用いられる声母 *ʒ-*を持つ漢字は、例外としてよい「人」を除き⁽¹⁷⁾、近世音では同じ韻母を持ち *ʒi* となるものばかりである。これらの漢字の発音は、声母 *ʒ-*を持つ他の漢字とは異なる発展をし、現代の標準語では *ai* となる。明・清代の中国語と外国語の対訳語集である『華夷訳語』の多くで音節末子音の *-r* は、一律これらの漢字と同音の「兒」によって音写されるという〔更科 2003〕。そして、長田〔1951〕や轟〔1988〕は『遼史』で契丹語の音写に用いられた中国語においては、すでに *ai* が成立していたと言う。以上を考慮すると、契丹語の音写に用いられる声母 *ʒ-*を持つ漢字の分布は、契丹語に声母 *ʒ-*に相当する音は

(17) 「人」は「袍達夫人厥只」(開撒名)に見られる。この語は複数の語から構成され、「夫人」は契丹語ではなく中国語を表記したものと考えるべきであろう。

存在しなかったが、契丹語に-rに近似する音は存在したことを示唆していると言える。音写に用いられる漢字のうち、声母lを持つ漢字が最も多いのは、契丹語のlだけではなくrなど複数の子音を音写するためにも用いられたためであろう。

また、語中と比べ語頭における声母lを持つ漢字の出現数が少ないことも興味深い。一般的にlやrはモンゴル諸語の固有語において語頭には出現しないことが知られている [Poppe 1955: 155-162]。語頭に声母lを持つ漢字は8回使用されているが、これらがすべて借用語であるかどうか判断することはできなかった。契丹小字資料においては、中国語の声母lの表記に用いられるㄌは固有語においても語頭の表記に用いられることがある。しかし、それらは何らかの母音を伴って発音された可能性もあるため現段階では、契丹語の固有語に置いて語頭のlの出現が可能であったのかどうか明らかにすることはできない。

4.3. 硬口蓋音

はじめに、漢字音写語に用いられる硬口蓋音声母を持つ漢字について、声母の種類と漢字音写語中での出現位置（語頭・語中）によって分類した音写に用いられる漢字の分布を（表5）に示す。

聶 [1988] は、契丹語の音写に舌上音⁽¹⁸⁾の漢字は用いられないので、契丹語には中国語のㄒ、ㄑに相当する音がないと言う。しかし、（表5）にみられるとおり筆者の調査によると音写に舌上音の漢字も使用されている。また、当時舌上音はすでに正歯音と合流しており、声母ㄒ、ㄑに変化していたと考えるべきである。契丹語を音写する際に、声母ㄒ、ㄑ、ㄑ-を持つ漢字はいずれも使用されており、契丹語でもこれらに相当する音が存在していたことを裏付けている。

(18) 知母 (*t-), 徹母 (*tʰ-), 澄母 (*d-), 娘母 (*ŋ-) に相当。

(表 5)

声母	用いられている漢字	総数
ʃ-	【語頭】(生*ʃ-) 稍 1, 槩 1, 沙 1, (船*dʒ-) 射 1, 實 1, 述 2, (書*ɕ-) 奢 1, 守 1, 世 1, (禪*z-) 杓 1, 石 1	12
	【語中】(生*ʃ-) 山 1, 沙 1, 稍 4, (船*dʒ-) 實 1, 述 1, 朮 2, (書*ɕ-) 書 1, 奢 1, 捨 1, 失 2, 室 4, 濕 1, (禪*z-) 署 1, 石 1, 寔 1	23
tʃ-	【語頭】(知*t-) 嘲 2, 哲 1, (莊*tʃ-) 爪 3, (崇*dʒ-) 查 3, 闌 3	12
	【語中】(澄*d-) 直 19, (莊*tʃ-) 爪 1, 札 2, (崇*dʒ-) 查 1, (章*ɕ-) 眞 5, 州 2, 只 26, 主 2, 軫 2, 燭 1, (船*dʒ-) 朮 2	63
tʃʰ-	【語頭】(徹*tʃʰ-) 撤 1, (初*tʃʰ-) 楚 2, 炒 1, 察 2, (昌*ɕʰ-) 出 1, 啜 1, 赤 1, 敵 1	10
	【語中】(澄*d-) 池 1, (昌*ɕʰ-) 闌 1	2
ʒ-	【語頭】なし	0
	【語中】(日*j-) 爾 1, 耳 1, 兒 1, 呪 2, 倆 1, 而 1, 人 1	8

4.2.で指摘した契丹語の-r の音写に用いられたと考えられる漢字を除くと、声母 ʒ-を持つ漢字が音写に用いられているのは例外と考えてよい「人」の 1 例のみである。これは、漢字音写を行った人物にとって、契丹語には中国語の声母 ʒ-に相当する音がなかったことを示唆している。

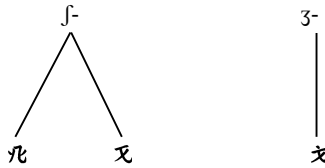
さらに、他の調音点と同様に、語中においては有気音声母を持つ漢字の出現が極めて限られているのも興味深い。

ここで、契丹小字で表記された中国語音についてみると、(図5)のように声母と契丹文字との対応の概略を図示することができる。

(図5)

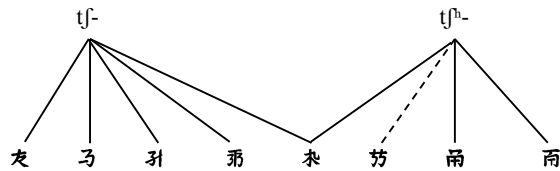
中国語声母

契丹文字



中国語声母

契丹文字



声母 ʃ- は主に 𐰇・𐰆 によって表記される。声母 ʒ- は主に 𐰇 によって表記される。ʃ- と ʒ- の表記は基本的に区別されている。このことから、契丹語では中国語の声母 ʃ- と ʒ- は弁別的であったことがわかる。さらに、これらの表記に用いられる文字が、声母 tʃ- や tʃʰ- の表記に用いられることはないことから、中国語の声母 ʃ-, ʒ-, tʃ- および tʃʰ- もそれぞれ弁別的であったと考えられる。𐰃・𐰅・𐰄 は声母 tʃ- の表記に用いられ、𐰈・𐰉 は声母 tʃʰ- の表記に用いられる。𐰃 は、tʃʰ- および tʃ- のどちらの表記にも用いられるものの、基本的には tʃ- と tʃʰ- は区別して表記されており、契丹語では中国語の声母 tʃ- と tʃʰ- は弁別的であると考えるのが穏当であろう。

孫 [2007] は、中国語の声母 ʒ- の表記に用いられる 𐰇 は中国語表記専用の文字であると言う。筆者の調査においても 𐰇 の使用頻度は少なく、基本的に中国語の表記に用いられており、孫 [2007] の指摘は妥当である。

4.4. 軟口蓋音

はじめに、漢字音写語に用いられる牙音・喉音の声母を持つ漢字について、声母の種類と漢字音写語中での出現位置（語頭・語中）によって分類した音写に用いられる漢字の分布を〔表6〕に示す。

〔表6〕

声母	用いられている漢字	総数
k-	【語頭】(見*k-) 歸 1, 孤 2, 糾 1, 監 1, 厥 1, 葛 1, 鑊 1, 隔 1, 國 1	10
	【語中】(見*k-) 公 3, 幾 1, 姑 2, 孤 1, 乖 3, 瑰 2, 昆 5, 干 1, 塢 1, 瓜 1, 金 1, 過 1, 幾 1, 古 15, 改 2, 謹 1, 堇 2, 衰 2, 蹇 1, 果 6, 谷 1, 吉 1, 厥 2, 骨 5, 割 1, 葛 8, 括 2, 決 1, 鑊 1, (羣*g-) 卷 1	75
k ^h -	【語頭】 なし	0
	【語中】 なし	0
x-	【語頭】(曉*h-) 虚 1, 懽 1, 虎 6, 旭 1, 歇 1, 喝 1, 血 1, 吸 1, (匣*f-) 兮 1, 奚 3, 渾 2, 毫 1, 和 1, 霞 1, 候 1, 紇 1, 曷 3, 轄 1, 穴 1, 頡 1, 合 12, 匣 1, 鶻 3	46
	【語中】(曉*h-) 化 1, 罕 1, 狻 5, 忽 2, 豁 1, 血 2, (匣*f-) 會 1, 曷 1, 合 3, 挾 1, 渾 1, 何 1, 河 1, 樺 1, 褐 1, 鶻 1, 完 1	25
ŋ-	【語頭】(疑*ŋ-) 訛 2, 牙 3, 瓦 1	6
	【語中】(疑*ŋ-) 牙 1, 伍 1, 隗 1, 雅 1, 瓦 4, 兀 6	14

3.2.で指摘したように漢字音写がなされた際には既に中古音の疑母*ŋ-はすでにゼロ声母と合流していた可能性があるため、声母 ŋ-を持つ漢字の分布から契丹語の音声・音韻についての情報を得ることはできない。

契丹語を音写する際に用いられる軟口蓋音の声母を持つ漢字の分布には大きな偏りが見られることが分かる。すなわち、声母 k-, x-を持つ漢字は音写の際に多く使用されるが、声母 kʰ-を持つ漢字は使用されない。これは、漢字音写を行った人物にとって、契丹語には声母 k-や x-の範疇と認識される音は多くあったが、声母 kʰ-と認識されるような音がなかったことを示唆している。一方、『契丹國志』や契丹小字資料が作成されたのと同時代の漢文墓誌においては以下のように音写に用いられる漢字として声母 kʰ-を持つものも見られる。また、『遼史』においても少数ながら人名の表記には声母 kʰ-を持つ漢字が用いられた例を見ることができる。(2)にそれらの例を示す。

(2)

渠列 ⁽¹⁹⁾ (近世音 kʰiu liɛ)	(地名)
可忒 (近世音 kʰɔ tʰei)	「無極」 ⁽²⁰⁾
坤不刻 (近世音 kʰuən bu kʰiai)	「鬼風」 ⁽²¹⁾
控骨里 ⁽²²⁾ (近世音 kʰuŋ ku li)	(人名)

『遼史』では基本的に用いられない声母が『契丹國志』など他の資料では用いられている理由については、資料によって音写システムがことなっていたためであるのか、あるいは資料によって音写された年代が異なるためであるのか明らかではない。もし、『遼史』に見られる音写が、契丹小字資料と同時代に作成された漢文墓誌に見られる音写と比べて新しく、『遼史』編纂時に成されたものであるならば、元代には契丹語の当該子音が摩擦音へと変化し

(19) 『耶律宗福墓誌』(1071年)に見られる [蓋(編著)2007: 159-169].

(20) 『契丹國志』卷二十四.

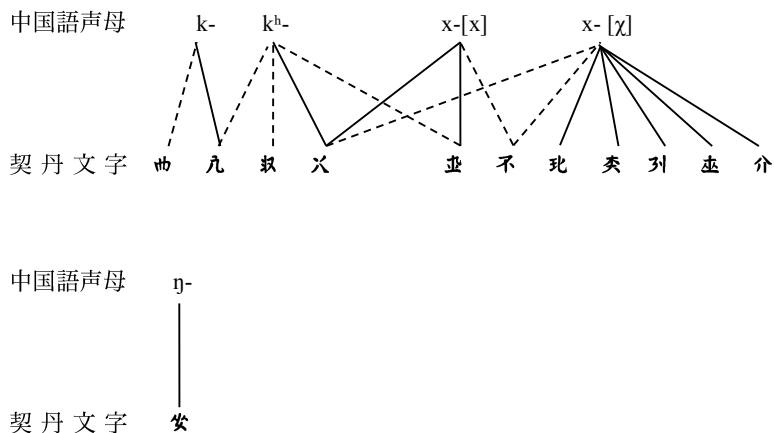
(21) 『燕北録』卷二十四.

(22) 『耶律宗教墓誌』(1053年)に見られる [劉2010].

たことを示している可能性もある。いずれにせよ『遼史』中の漢字音写語に声母 k^h -を持つ漢字が用いられない事実は注目すべきである。

この漢字の分布は契丹小字資料から得られるデータとも矛盾しない。つぎに、契丹小字で表記された中国語音を見てみると、〔図6〕のように声母と契丹文字との対応の概略を図示することができる。

〔図6〕



声母 η -は規則的に **𐰽** によって表記されている。**𐰽** は η -韻尾の表記にも用いられていることから鼻音 η を含む音価を表示していたと考えてよい。中国語の k -, k^h -, x -の契丹小字での表記は複雑である。声母 k -は、基本的に **𐰽** で記される一方で、声母 x -は **𐰽**・**𐰽**・**𐰽** など多くの文字で記され、区別して表記されていることがわかる。また、声母 k^h -も **𐰽**・**𐰽** で表記されており、声母 k -とは区別されている。したがって、契丹語では中国語の声母 k -と k^h -、および k -と x -は弁別的であったと考えられる。その一方で、声母 k^h -と声母 x -は **𐰽** や **𐰽** など同じ文字によって表記されていることから、契丹語では中国語の声母 k^h -と声母 x -は非弁別的であったと考えられる。音韻体系の対称性を考慮し、他の調音点と同様に契丹語には2種の阻害音が存在していたと考えるのが合

理的だが、(表6)の漢字の分布を考慮するならばそのうち一方は音声として中国語の声母 *x*-に近いものであったと考えるべきであろう。中国語の *x*-の表記には *kh*-の表記に用いられない文字(𨺲, 𨺳, 𨺴, 𨺵, 介)も使用されているが、これらの文字は契丹語に存在した後部軟口蓋音の別の音素を表示する文字であると考えられる⁽²³⁾。

5. 音素配列

契丹小字の表音システムは完全に解明されたわけではなく、音価もすべての文字に与えられているわけではないため、契丹語の音素配列に関しては現段階では詳細に調査することはできない。しかし、音写に用いられる漢字の分布には契丹語の音素配列の特徴が反映されている可能性があるので、本稿で収集したデータをもとにその問題について扱いたい。先行研究においても契丹語の音素配列については十分な研究は行われていない。Kane [2009: 255] は契丹語には本来それぞれの調音点に1種の阻害音しか持たず、無声音／有声音あるいは無気音／有気音の違いは音韻的に有意義ではなかったとする。一方で、Shimunek [2011] は、契丹語は語頭においては有声音／無声音の違いは有意義ではなく、自由変異の異音としてのみ存在していた可能性を指摘している。このように、音素配列に関する断片的な記述が見られるものの見解は一致しておらず、また十分な根拠が示されているわけではない。

前節において漢字音写語に見られる漢字の配列を語頭・語中に分けて示したが、語頭と語中とで異なった分布を示すことが明らかとなった。すなわち、語頭においては阻害音の分布に関して、有気音声母・無気音声母のいずれを持つ漢字も出現するのに対して、語中においては有気音声母を持つ漢字の出現は極めて少ないということである。

(23) 契丹小字による牙音・喉音声母の表記の詳細に関しては Takeuchi [2011] を参照されたい。

漢字音写によってモンゴル語を表記した『元朝秘史』においてはモンゴル語に存在した2種の閉鎖音を有気音声母と無気音声母を使い分けることによって書き分けている[服部 1946: 79]。契丹小字資料から得られるデータは契丹語には有声音／無声音の2種の阻害音があったことを示唆している。もし、『遼史』の音写システムが『元朝秘史』と似た特徴を持つと仮定するならば、この特徴的な漢字の分布は、契丹語は語中においては阻害音のうち無声音の出現に制限があった、あるいは語頭においてのみ有声音／無声音の対立が音韻的に有意義であったことを示している。

ここで、契丹小字資料から得られるデータに注目したい。4節で示したように、契丹語の唇音および（前部）軟口蓋音にはそれぞれ2種の阻害音が存在していたことが比較的明瞭に現れている。契丹小字はハングルのように語を単位として文字ブロックを構成することによって表記される。契丹語の唇音の阻害音の表記に用いられる𐰽<p>および𐰾、（前部）軟口蓋音の阻害音の表記に用いられる𐰼<k>および𐰾<g>それぞれの文字ブロック中での出現度数は〔表7〕のようにまとめることができる⁽²⁴⁾。

〔表 7〕

字形	語頭の表記	語中の表記	語尾の表記
𐰽<p>	1175	16	7
𐰾	895	431	105
𐰼<k>	857	51	
𐰾<g>	1060	380	287

⁽²⁴⁾ 吉如何 [2007] のデータに基づく。

文字ブロック中でのこれらの文字の出現には興味深い特徴がみられる。即ち、𐰚や𐰚<g>など有声音の子音を表示する文字は文字ブロックのどの環境においても高い頻度で出現するのに対し、𐰚<p>や𐰚<k>など無声音の子音を表示する文字は出現が語頭に大きく偏っているということである。この契丹文字の分布は、漢字音写語に用いられる漢字の分布が示唆する、語中においてはそれぞれの調音点に存在する2種の阻害音のうちその一方の出現に制限があったという推定と矛盾しない。

以上より、契丹語の阻害音に見られる無声音／有声音の対立は語頭においてのみ有意義であったと考えたい。

6. おわりに

本稿では、漢字による音写によって記録された契丹語に注目し、その表記に用いられる漢字の分布から契丹語の音声・音韻について考察を加えた。結果として、音写漢字の分布は契丹小字資料から再構される契丹語の音韻体系と矛盾するものではなく、契丹語の音声・音韻の特徴を示す重要なデータとなりうる事が明らかとなった。本稿の分析によって、契丹語の音声的特徴を、一部明らかにすることができた。さらに、契丹語の音素配列に関しては、語頭と語中では出現可能な子音に大きな違いがあり、一部の阻害音に見られる有声音／無声音の対立は語頭においてのみ有りえたという契丹語の音素配列に関する特徴も明らかにすることができた。これらに関してはこれまで指摘されたことがなく、契丹語の音韻の興味深いデータということができるとであろう。

参考文献

- Franke, Herbert [1969] “Bemerkungen zu den sprachlichen Verhältnissen im Liao-Reich”, *Zentralasiatische Studien* 3, pp. 7-43.
- Janhunen, Juha [2003] “Para-Mongolic”, in Juha Janhunen (ed.), *The Mongolic Language*, New York: Routledge, pp. 391-402.
- Kane, Daniel [2009] *The Kitan Language and Script*. Leiden-Boston: Brill.
- Poppe, Nicholas [1955] *Introduction to Mongolian Comparative Studies*. Mémoires de la société finno-ougrienne 110. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.
- Shen, Zhongwei [2007] “Sino-Khitans Phonology” 『中国語言学集刊』第一卷第二期, pp. 141-199.
- Shimunek, Andrew [2007] *Towards a Reconstruction of the Kitan Language, with Notes on Northern Late Middle Chinese Phonology*, M.A. Thesis, Indiana University, Bloomington.
- Shimunek, Andrew [2011] Review of *The Kitan Language and Script*, by Daniel Kane. *Acta Orientalia*, Vol. 64, No. 1, pp. 101-107.
- Takeuchi, Yasunori [2011] “Kitan Transcriptions of Chinese Velar Initials”, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.* Vol 64 (1), pp. 13-23.
- Wu, Yingzhe & Juha Janhunen [2010] *New Materials on the Kitan Small Script*. Folkestone: Global Oriental.
- 愛新覺羅 烏拉熙春 [2004] 『契丹語言文字研究』京都: 東亞歷史文化研究会.
- 馮 家昇 [1987] 「《遼史》源流考」『馮家昇論著輯粹』北京: 中華書局, pp. 99-160.
- 傅 林 [2013] 「論契丹小字与回鶻文的關係及其文字改革」『華西語文学刊』8, pp.58-67.
- 蓋 之庸 (編著) [2007] 『內蒙古遼代石刻文研究』呼和浩特: 內蒙古大學出版社.
- 服部四郎 [1946] 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』東京: 文求堂.
- 平山久雄 [1967] 「中古中国語の音韻」牛島徳次 等 (編) 『中国文化叢書 1 言語』東京: 大修館書店, pp. 112-166.
- 吉如何 [2007] 「契丹小字原字形規範与原字總表」首屆全國契丹文字及相關領域學術研討會發表資料.
- 劉 鳳翥 [2010] 「契丹小字《耶律宗教墓誌銘》考釋」『文史』第 4 輯, pp. 201-228.
- 劉 浦江 [2004] 「從《遼史・國語解》到《欽定遼史語解》——契丹語言資料的源流」『歐亞學刊』No. 4, pp. 145-164.

- 聶 鴻音 [1988] 「論契丹語中漢語借詞的音系基礎」『民族語文』No. 2, pp. 41-49.
- 寧 繼福 [1985] 『中原音韻表稿』長春: 吉林文史出版社.
- 長田夏樹 [1951] 「契丹文字解読の可能性」『神戸外大論叢』Vol. 2, No. 4, pp. 40-66.
- 更科慎一 [2003] 「所謂甲種本華夷訳語の漢字音訳手法の一端」『人文学報』第 341 号, pp. 1-18.
- 白鳥庫吉 [1910-13] 「東胡民族考」『史学雑誌』第 21 編 [1910]: 369-393, 741-762, 1003-1026, 第 22 編 [1911]: 63-88, 589-606, 1265-1288, 1381-1407, 第 23 編 [1912]: 117-142, 237-262, 1013-1030, 1133-1148, 1243-1269, 第 24 編 [1913]: 17-45, 854-884. [白鳥 1970: 63-320 に収録]
- 白鳥庫吉 [1970] 『白鳥庫吉全集 第四卷』東京: 岩波書店.
- 孫 伯君 [2004] 『金代女真語』瀋陽: 遼寧民族出版社.
- 孫 伯君 [2007] 「契丹小字幾類声母の読音」『民族語文』第 3 期, pp. 44-51.
- 孫 伯君・聶 鴻音 [2008] 『契丹語研究』北京: 中国社会科学出版社.
- 楊 耐思 [1981] 『中原音韻音系』北京: 中国社会科学出版社.
- 吉池孝一 [2003] 「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』第 13 号, pp. 18-21.
- 吉池孝一 [2004a] 「止摂開口精母系の漢字音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』第 14 号, pp. 11-14.
- 吉池孝一 [2004b] 「止摂開口莊章母系の漢字音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』第 15 号, pp. 11-15.
- 于 宝林 [1998] 『契丹古代史論稿』合肥: 黄山書社出版.